

|          |   |
|----------|---|
| 氏名       | り ちょうい<br><b>李 長蔚</b>                               |
| 学位(専攻分野) | 博 士 ( 学 術 )   |
| 学位記番号    | 博 甲 第 8 4 8 号                                       |
| 学位授与の日付  | 平成 29 年 9 月 25 日                                    |
| 学位授与の要件  | 学位規則第 4 条第 1 項該当                                    |
| 研究科・専攻   | 工芸科学研究科 造形科学専攻                                      |
| 学位論文題目   | <b>東アジアにおける黄檗建築様式・技術の伝播に関する研究—<br/>黄檗天井と唐破風を中心に</b> |
| 審査委員     | (主査)教授 清水重敦<br>教授 石田潤一郎<br>准教授 矢ヶ崎善太郎               |

## 論文内容の要旨

本論文「東アジアにおける黄檗建築様式・技術の伝播に関する研究—黄檗天井と唐破風を中心に」は、中国明代末期に日本に伝播した建築様式である黄檗建築様式について、同時期に伝播した台湾の寺廟建築を含めて東アジアにおける建築様式と技術の伝播という観点から考察するものである。論文は、序論、4章からなる本論、結論の全6章で構成される。

序論では、本研究における目的と問題意識を提示し、既往研究に触れながら本研究の視座を述べる。中国明代から清代に、福建省を中心とする中国南方から日本及び台湾に伝えられた黄檗建築様式については、日本及び台湾に先行研究があるものの、その源流をたずねる研究は限定的であった。そこで本研究では、東アジア建築文化圏において比較研究をおこない、その建築的特徴を考察する。黄檗建築様式には、架構形式や細部や建築装飾などにおける共通点が多くはないのだが、起り状に湾曲した天井形式である黄檗天井については各地で共通している。よって、この黄檗天井の源流とその受容の過程を明らかにすることで、黄檗建築様式・技術の伝播のあり方を分析することを本論文の目的とする。黄檗天井を考える上で特に注目されるのが、これまで関係性が論じられてこなかった黄檗天井と日本の唐破風との関係である。本論文では両者に関係性があるとの仮説を立て、両者の関係を論じることでより広い視野に立った建築様式の伝播を考察している。

第一章では、明清時代の中国福建省建築と江戸時代の黄檗様式建築、17世紀～19世紀の台湾寺廟建築を対象とし、その建築的特徴を概括する。福建省の建築様式・技術は地方により特色が大きく異なっており、日本の黄檗様式建築は一つの建築様式・技術ではなく、福建省の四つの地方の建築の影響を受けていることを指摘している。また、日本の黄檗建築様式・技術は、部分的に日本の禅宗様と和様の折衷様式と融合されていることも論じている。とりわけ黄檗建築様式初期の事例を含む長崎の四福寺については、崇福寺などの初期事例が基本的には中国の建築文化の流れに位置する「黄檗様式」というべきものであるのに対し、聖福寺などの後の事例は「擬黄檗様式」というべき日本の建築文化に属していることを指摘している。

一方、明清時代の台湾寺廟建築は、福建省建築により直接的な影響を受けているが、細部装飾に台湾独自の紋様や題材が発展したことがうかがえる。

第二章では、黄檗天井の源流の一つと目される中国建築における起り状に湾曲した屋根形式、すなわち「捲棚」について、宋元時代の絵画資料と現存遺構からその建築的特徴を論じている。絵画資料からは、捲棚が次の二類型に分類される。一つは建物の入り口として作られた妻入りの捲棚で、これは唐破風造の屋根との類似が指摘される。もう一つは建物の前面に並べられた平入りの捲棚である。現存遺構は中国の北方と南方とで様相を異にしている。北方系の建築では捲棚の形が外部に現れた屋根が多く、南方系は内部の天井が捲棚の形をしたものが多い。また楼閣建築の入り口と庭園建築に捲棚が多用されることを指摘している。

第三章では、前章を踏まえつつ、中国及び東アジア各国の建築に見られる起り状に湾曲した天井である「捲篷」（日本では「黄檗天井」）について、その源流と変遷の過程を考察する。捲篷の源流には捲棚と殿堂建築の天井の二つが考えられるが、捲棚からの転化として発生したものと考察されている。捲棚の源流を探ると、東漢代の発掘遺物に遡ることができ、素朴な建築に加え、船舶や車両の屋根として用いられたことがわかる。船舶・車両には耐衝撃性と耐候性が求められるため、輪垂木を用い植物性の材料で葺いた湾曲した屋根が用いられたものと考察する。後にそれが建築に用いられるようになり、瓦葺のものが登場したものと考えられる。これが天井としての捲篷へと転化する過程としては、まず宋代に主体部の前に捲棚の棟を平入で並べる形式が、船舶、車両、そして建築において生まれ、次いでこの形式を草架という小屋組で覆うことで捲棚が内部化され、天井としての捲篷が成立したものと考察する。

第四章では、捲棚・捲篷と源流を同じくするものと想定される日本の唐破風につき、その構造形式を詳細に検討した上で、源流を考察する。唐破風は、太田博太郎氏により日本で独自に成立したとされた論が通説となっているが、中国の捲棚屋根は日本の唐破風とよく似た曲面を持っており、本論文では両者に関係があることを想定し、考察を進めている。唐破風の構造形式につき絵巻物と現存遺構から詳細に検討した結果、概ね平唐門・軒唐破風・妻入り唐破風造の三種に大別されることを指摘する。このうち最も早く平安時代に誕生した平唐門は、意匠は上土門、構造は古代の棟門を源流として成立したと考えられる。鎌倉時代には、中国由来の唐車・唐屋形船や宋代絵画に描かれた捲棚屋根を原型として、割拝殿に見られる唐破風造や軒唐破風が成立し、平唐門の構造も平入捲棚屋根の影響を受けて変化した。室町時代に入ると、これらの意匠・構造が混合して向唐門・妻入り唐破風造が成立したと考えられる。つまり唐破風の源流には、日本の上土門が挙げられると共に、中国の捲棚屋根を想定する必要があるものと結論付けられる。こうした複雑な源流を持った唐破風の手法は近世の黄檗天井にも用いられた。

以上の考察の結果をまとめ、結論としている。

## 論文審査の結果の要旨

東アジアにおける伝統建築の研究は、各国・地域内での研究には多くの蓄積があるものの、国・地域を横断した研究は言語の壁もありそれほど多くの成果があるとは言い難い。本研究はこうした状況に対し、黄檗建築様式という日中台の関係が明らかながら研究蓄積の薄いものを対象に、日本語、中国語、台湾語に堪能な申請者の語学力を活かして直接的な比較研究をおこなったもので、東アジアにおける研究状況に一石を投じる意欲的な研究である。

本論文の主要テーマは黄檗建築様式の伝播であるが、中でも特に黄檗天井という特異ともとれ

る細部形式に注目して論じたものである。一見、微細な対象を扱ったものを感じられるが、その成立を中国漢代にまで遡る時間軸の長さ、日本の唐破風造との関連を考察した視野の広さなど、時間・空間ともに雄大なスケールを持った研究となっている。

論文中特筆されるのが、黄檗天井の起源の一つである捲棚の源流を探る論考と、唐破風造への着目である。捲棚の源流については、建築だけでなく船舶・車両に着目することで、起り状湾曲屋根という他の屋根形式と決定的に異なる形状について、明瞭な解釈を与えることに成功している。この視点は太田博太郎による唐破風論における方法を引用したものであるが、太田が形式の伝播についてのみこの方法を用いているのに対し、形の有する本質的意味に踏み込んだ考察をおこなうことで独創性の高い研究成果が得られている。

唐破風造については、これまで日本で生まれたものとされてきた通説に対して、中国建築における捲棚との関係に着目して論じており、優れた発想力を示している。これを論証するための方法においては、これまで本格的に論じられてこなかった唐破風造の現存遺構を網羅し、構造形式と技法からその類型を整理するという技術史的観点を強調した方法をとっており、高い実証性を有している。また絵巻物に描かれる唐破風造も網羅的に検討し、現存遺構と重ね合わせることで、説得的な史的展開過程を描くとともに、絵画資料における表現の信憑性にも言及し得ている。この考察で得られた成果は日中建築史に新しい視座を提供するものであるが、同時に日本建築史の研究成果としても高い水準を示すものといえる。

以上のように、申請者が本論文によって明らかにした内容は、中国建築史及び日本建築史それぞれの研究に資するところ大であるのはもちろんのこと、相互の研究方法を積極的に交差させることが試みられており、東アジア建築史に新たな視座を投げかける研究として高く評価できる。

本論文の基礎となった論文は、査読付き論文(1)(2)(3)で、いずれも申請者が筆頭著者あるいは単著である。

- (1) 李長蔚「古建筑捲棚之演變與發展初探」『伝統建築装飾芸術学術研究会論文集』、台湾伝統建築装飾芸術学会、台湾台北、pp.39-56、2015年5月。
- (2) 李長蔚 Yuzhuo Chen「The discussion on the evolution and development of ancient architecture-round ridge roof」『東アジア建築史』、東アジア建築史学会、韓国光州、pp.689-692、2015年11月。
- (3) 李長蔚「探讨台湾古建筑彩绘修复保护技术及理念」『中国紫禁城学会会刊』、中国紫禁城学会、中国北京、印刷中。